INFORMATION

いのちと出会う会

生きること、老いること、病すること、そして死についてじっくり仲間と語り合う、そんな集いが「いのちと出会う会」です。

いのちと出会う会も、スタートから14回開催、寺町倶楽部の恒例事業として、すっかり定着いたしました。いよいよ今年度の第4期の日程が決まりました。

1月は、倶楽部の運営委員でもいらっしゃる蔦田さんに、また2月はコモンズフェスタで「お寺の出前の会」でご参加いただいた、大崎さんの登場です。3月以降も、様々な方に、“いのち”をテーマに語っていただきます。

毎月第3木曜に開催、どなたでも参加できます。ぜひあなたもいらしてください。

詳細は、同封のチラシをご覧ください。

●

第15回 1月17日（木）

「いのちと平和を語りつぐ」

話題提供者

関西こども文化協会副理事長

蔦田夏さん

21世紀はやはり「戦争」で幕開けとなった――。

私たち日本人は戦争体験者として何を社会に語り継ぐべきなのか。風化してしまいがちな戦争の記憶を、長崎に生まれた被爆二世が家族の生き方を通して語ります。いま改めていのちと平和の意味を考えます。

●

第16回 2月21日（木）

「平成版・看病用心鈔を語る」

話題提供者

浄土宗安福寺僧侶

大崎信久さん

鎌倉時代に、浄土宗の僧・良忠上人によって書かれた「往生」の手引き「看病用心鈔」。中世から伝わる病者と看病人の心得は、今日の医療と介護が見逃してはならない点に光を当てています。「お寺の出前の会」で活躍する若手僧侶が熱く語ります。

◆　◆

◎時　間：午後6時30分～
◎参加費：800円
◎会　場：應典院

お申し込みは事務局まで。

歳末恒例・自分感謝祭は12月26日に開催!!

恒例の自分感謝祭は、例年通り12月26日に開催します。

この儀式は、今年一年をふりかえって、自分の行いを懺悔する、應典院だけのオリジナル法要。一人ひとり、懺悔のカードを仏前で浄梵（聖なる火）にくべ、新年の新たな出発を誓います（住職からのファイナルメッセージもあります）。

毎年、「心が洗われた気分」、「自分自身にご苦労さんと言いたい」、「世界が広がった経験がうれしい」など、たくさんの感動を招いています。

荘厳な電子オルガンの演奏の中、光につつまれながら、一年の終わりにふさわしい「鎮めの儀式」を堪能してみませんか。

なお、18時からの夜の部は、終了後に「年忘れ交流会」を開催、持ち込み歓迎ですので、こちらもふるってご参加ください。應典院主催／寺町倶楽部協力。

◆日　時：12月26日（水）
　①14時～　②18時～
◆参加無料（交流会は参加費1000円）
◆数珠をご持参ください。
◆申込みは事務局まで

【新入会員ご紹介】

（2001年12月12日まで）

前号発行以降にご入会いただいた方々です。ありがとうございました。

○一般会員
【大阪府】
今井　英夫　守口市
○個人会員
【大阪府】
李　有師　大阪市北区

サリュ　VOL. 29
應典院寺町倶楽部のニューズレター

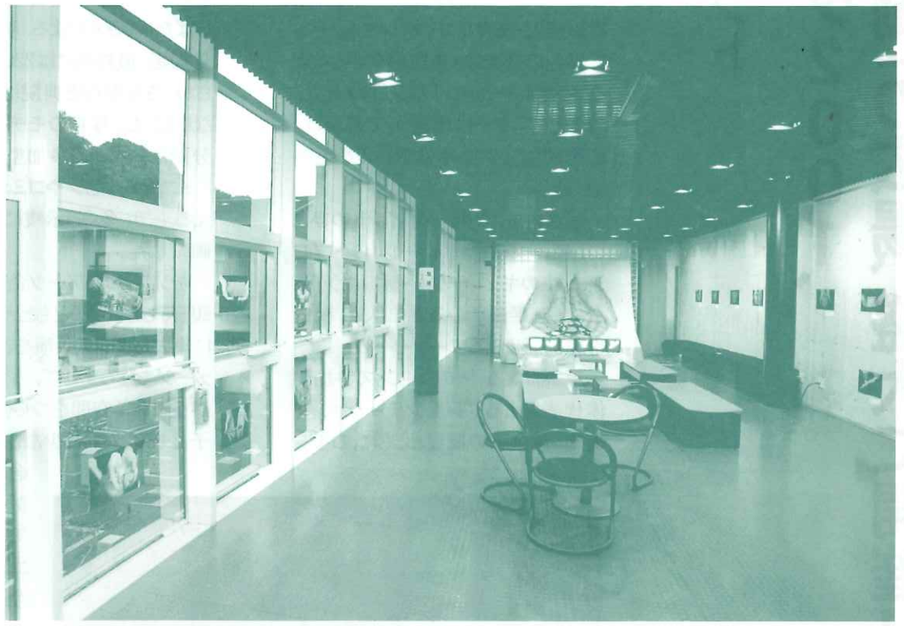
発行日　2001年12月13日（偶数月発行）
編集人　池野亮、大塚郁子、川井田祥子
発行所　應典院寺町倶楽部
〒543－0076
大阪市天王寺区下寺町1－1－27
TEL06－6771－7641
FAX06－6770－3147

應典院寺町倶楽部のニューズレター

Salut

［サリュ］
フランス語で救いの意

2001 DECEMBER
vol.29



100年前の民家を改装して地域の人に開放しているスペースがある。詩の朗読会あり、馬頭琴の演奏あり、創意で自由に利用できるという。デパートへ徒歩で行けるのに、まわりは小ぶりな家が軒を連ねたたずみ、とても静か。まるで都会の中の小さなすきまのようだ。

子どものころ、学校と家の間にあった草の茂った空き地。時間も忘れて夢中になって遊んだものだった。いまの私たちにそんな空き地はあるだろうか？

EVENT REPORT

寺町倶楽部秋の大イベント
コモンズフェスタ2001、「出会い」と「協働」の広場、盛大に開催!!

應典院寺町倶楽部、秋のメインイベント・コモンズフェスタ2001「Art Of Life ～生き方、新・呼吸」(第10回大阪生涯学習フェスティバル協賛事業／大阪市教育委員会他後援)が、11月4日～11日までの8日間、開催されました。今回で4回目を迎え、ますます内容も充実。さまざまな分野で活躍する18のNPO団体が、22の企画を実施し、期間中2000名近い参加者でにぎわいました。

恒例となったコモンズフェスタ、今回はアーツ・コラボレーション・プロジェクトをはじめ、モニターボランティア、大学との協働、クーポンの発行など数々の試みを実践、NPOやアートの相互の交流や参加を促進しました。また、行政、企業の参加もあり、多様なセクターによる重層的な「場」を創り上げることができました。

3部構成で行われたオープニングは、11月4日。第1部では、ボイスパフォーマー・上田假奈代さんと舞踏界の怪児・デカルコ・マリィさん、そして異色の音楽家・奥田扇久さんによるコラボレーション「ハシゴの上で。詩人とダンサーは出逢う」で幕開け、幻想的な世界が本堂ホールを包みました。

引き続き、今年のポイントのひとつ、アーツ・コラボレーション・プロジェクトのキュレーター・樋口よう子さん、高松平藏さんのお二人と、秋田事務局長によるアーツ・トーク。

第2部は、恒例のコモンズ参加団体代表によるプレゼンテーションを実施。各企画の概要とともに、コモンズフェスタにかける熱い意気込みを伝えてくれました。

第3部は交流会。扇谷順介会長の乾杯の発声で開会。2階の気づきの広場は大にぎわいで、NPOスタッフ、アーティスト、ボランティア、さまざまな人々がくつろぎながら話に花を咲かせていました。

今回のコモンズの看板企画は、期間中館内を飾ったアーツ・プロジェクト「My object, I and object～私のモノ、私とモノ」。現代美術作家しばたゆりさんによる、掌の写真を毎日撮影。最終的には220枚以上展示され、さながら應典院は写真の森となりました。写真のモデル自身が自分語りを試みる参加型アートで、コミュニケーションやコミュニティを考える上で、多くの示唆に富んだ好企画でした。

もうひとつのアーツ企画「ダンス参観日」も好評。子どもと大人が同じ場に集まり、ダンス公演をきっかけに、イメージを膨らませて、言葉にし、対話が生まれる空間をつくろうとの企画。子どもの参加が少なかったのは残念でしたが、ダンスを通して様々なコミュニケーションが生まれました。



また、未来のコモンズ人育成プログラムとして、大学コンソーシアム京都の中村正助教授、京都橘女子大学の小暮宣雄助教授による公開ゼミを実施、NPOと社会教育・生涯学習行政とのパートナーシップ研究会が企画を実施するなど、従来になかったセクターが参加、アサヒビール、トヨタ自動車など企業メセナにもご協力をいただくなど、多様なセクターを巻き込んだコモンズの世界が広がりました。

その他のプログラムも多彩で、臨床哲学カフェ、フェアトレードのファッションショーなど、「司法」「教育」「福祉」「まちづくり」など、個性豊かな企画が目白押し。連日会場は盛況、参加者も8日間で2000人近くを記録しました。

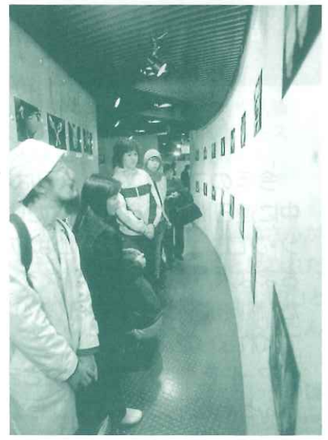


倶楽部主催の事業は、コモンズの締めくくりとして、最終日の11月11日、第30回寺子屋トーク「お骨の行方～人生の店じまいを考える」を開催。ノンフィクション作家の井上治代さん、妙光寺住職の小川英爾さんによる、死後の自己決定や自立について語り合いました。

その他の取り組みとして、今年もモニターボランティアを公募。コモンズに参加した団体の活動現場にふれながら寺町倶楽部を客観的に評価し、パートナーとなってもらうことが目的です。コモンズフェスタの各プログラムに参加したり、参加団体を訪ねたりして、レポートを書いてもらいました。

「セクターの多様性だけでなく、モニターやアートボランティアなど若い人の参加も多く、出会いの接点がさらに広がったと思います。コモンズがいっそう市民のお祭りとして定着していくといいですね」と秋田事務局長。

多くの人々が交流するコモンズフェスタ。今年は分野が広がった分、多様な出会いと交流が生まれ、味わい深いものになったと自負しています。今後も、回を重ねるごとにパワーアップし、お寺と地域と市民をつなぐイベントとして定着していければと思います。来年は新たにどのような味わいが加わるのでしょうか？ご期待ください。



寄稿

けったいな場　コモンズフェスタ

近畿労働金庫(ろうきん)　法橋　聡

企業人またはビジネスマンには、よく関連会社への出向などがありますよね。僕の場合も99年6月から約2年間、いわゆる出向をしてたのですが、ちょっと通常と違って出向先はなんとNPO。時代が大きく動いている中で、ろうきんの事業のアンテナを伸ばそうと、大阪ボランティア協会NPO推進センターに出向してました。回りからは「片道切符の男」「あの人は今」などと呼ばれつつ、NPO漬けの毎日にすっかりはまってしまいました。それと言うのもけったいな、いや、個性豊かなNPOな人々にたくさん出会ってしまったお陰なのですが、その中でも應典院という「場」、または、その凝縮された「空間」でもあるコモンズフェスタのインパクトはとても大きかったわけです。

演劇、映像、音楽……あらゆる事柄がゴタ混ぜ、てんこ盛りのこの「場」には、「イベント主催者と参加者」という役割が固定されていない楽しさ、またはお尻のむずがゆさがあります。参加者なのかスタッフなのか、ようわからん混沌の中に身を置くことで、誰もが少しずつ身にまとった鎧を1枚ずつ脱いでいつのまにか自分と向き合ってしまう、そんな「空間」。カオスの中から何が始まるのか、そんな魅力があるわけです。

この訳のわからなさはNPOの世界にあっても異彩を放ってます。「タテ割行政の弊害」が指摘されますが、NPOにおいても活動がより専門性を増すほど、一方で分野を超えたつながりが欠落していくことがあるかもしれません。この意味でも、みんなが同じ方向を向かない應典院という「けったいな場」の持つ意味は大きいなと思います。

「公」にすべてを委ねるのではなく、市民が地域の公益の担い手になろうとしつつある時代。一方、混沌の中で時代が大きく動こうとしている今、組織発というよりもあくまで自分発。個々の主体的な関わりが社会の課題に向き合うエネルギーにもなるのかな。その水先案内人として、コモンズフェスタという「空間」にはやはり目を離せません。

コモンズフェスタ
記念座談会

それぞれの「場」について語りあおう

コモンズ空間によせる想い

今年のコモンズフェスタは本当ににぎやかでした。なかでも期間中に連日開催された、しばたゆり(※1)さんの“アート・コラボレーション・プロジェクト(※2)”には、アートボランティア(※3)をはじめ、さまざまな人が関わり花を添えてくれました。一方、11／10(土)に行われた“應典院ダンス参観日(※4)”では、子どもたちがパワフルに活躍してくれました。

アートを軸に展開されたさまざまな出会いの仕掛け人、樋口よう子さんと高松平藏さんに、コモンズの感想やアートに触れることの意味について語り合っていただきました。

〈司会:辻牧子(應典院インターン、立命館大学4回生)〉

(※1)しばたゆり……アーティスト(現代美術)。兵庫県生まれ。人、場所、時間、モノとの関わりについて検証し続けている作家。2000年にはオランダのロッテルダムで一連の作品を発表するなど、海外でも活躍中。

(※2)アート・コラボレーション・プロジェクト……自分にとって大切なモノを持参し、それを手のひらの上に乗せて写真に撮る。同時に、それぞれがモノにまつわる思いを語り、ビデオにも収録。撮影した写真やビデオは期間中、会場に展示&上映された(参加者のべ220人)。キュレーター(企画者)は樋口よう子さん。

(※3)アートボランティア……しばたさんの作品制作を補助するために一般公募したボランティア。東京からの参加者など、個性と意欲あふれる魅力的な面々が集まった(計16人)。

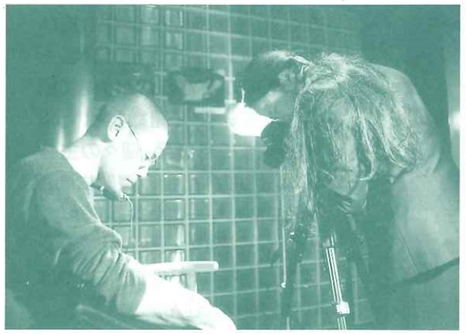
(※4)應典院ダンス参観日……ダンスという身体表現を通して、自分の感情や言語感覚を見直そうという試み。ダンスを見て感想を語り合う子どもたちを「授業参観」。さらに、ダンサーと保護者も交えた「PTA懇談会」も実施(参加者約40人)。キュレーターは高松平藏さん。

アートは“食わず嫌い”!?

――樋口さんには、昨年に引き続いて今年も関わっていただきましたが、今回の企画の意図を説明していただけますか。

樋口●企画を立てるとき、この應典院という空間をどう活かせるかということを考えました。以前から野外での展示をわりと多く手がけていて、場所の特性を活かすことは苦にならない方なんですが、コモンズはすごくたくさんの人がいて、しかも立場や年齢はもちろん、一人ひとりがもっている興味や関心はさまざま。そういう多様な人々の集う場をどう活かすかに、焦点を絞って考えました。

しばたさんの作品は「大切なモノ」をテーマに、自分とモノとの関係を問い直すとともに、「大切なモノはいずれ無になって土に返ってしまうのですよ」というメッセージも含まれています。ここにお墓があることを考えると、ピタッとはまるように感じたんですね。



――去年の経験から得たことで、企画に反映させたことはありますか?

樋口●去年は出品者が多すぎた、内容がむずかしすぎたなど、いくつかの反省がありますが、いちばん大きな反省点は、アートに関心のない人に対してどれだけの働きかけができたか、ということでした。コモンズは本当に多様な人たち、アート以外の分野に関心をもっている人が大勢集まるので、その人たちとどうつながっていけるか。無理につかまえて作品を見せるというやり方ではなく、自ら進んで作品を見てもらえるような、そういう関係づくりの方がこの場にふさわしいだろうと考えたんです。そういう意味では本当に、しばたさんでなければできなかった、と感じています。

――「作品を見る」どころか、今回は「作品の制作過程に参加する」という大きな変化がありましたね。

樋口●去年はアーティストが作品を作って、「これどう?」と見せるだけでしたが、今回はここに来た人が参加して初めて作品ができるという参加型の企画でした。アーティストと参加者の立場を変える、お互いが制作者であり鑑賞者でもあるということが、いちばんのポイントです。

――撮影した写真をそのつど展示に加えていったので、自分の写真を改めて見にくる人もいましたね。

樋口●ええ、その様子を見て「私も撮ってほしい」と思う人が新たに参加したりして、予想以上に参加者が多くなってビックリしました。

子どもに学ぶ“参観日”

――多様な人の集まるコモンズに、今年はさらに“子どもの参加”という新しい要素を持ち込んでくださったのが“應典院ダンス参観日”でした。高松さんの企画の意図はなんだったのでしょうか。



高松●もともとは「ふだんの生活の中で、ダンスを見る時間のない大人に来てほしい」という思いがありました。そういう人たちを巻き込むために「子どもと一緒に」という条件をつけた。つまり、子どもに見せるなら親も付き添って来なくてはいけないだろう、という下心のある企画だったんですね(笑)。さらに言うなら、ダンスを見て感想を語り合うとき、子どもはその場を活性化させる働きをしてくれるだろう、という大いなる期待もありました。

ダンスを初めて見た大人が感想を言葉にするのはむずかしいんですが、その点、子どもは見たままを率直に言うし、大人にはない言語感覚を持ち合わせていたりするでしょう?

そういう子どもの発言に刺激されて、大人がどんどん自由に発言してくれればなあ、と思っていました。そういう視点で振り返ってみれば、今回のダンス参観日はある程度成功したと思います。



高松平藏(たかまつ・へいぞう)さん
ジャーナリスト。1996年に京都経済新聞社の立ち上げに参画するなど、地域にこだわった取材活動を行ってきた。98年より2年間ドイツに滞在。主な取材分野は芸術・文化、環境、IT。文化行政や文化芸術についての講演活動や執筆活動を行う。大阪市文化振興会懇話会アドバイザリースタッフの一人。かわいい3人の子どもをもつ、よきパパ。

――先日、アートボランティアの一人が「ここに参加して初めて、アートが成立するには“鑑賞者の能動性”が重要だということを知った。いままでは制作者と鑑賞者は分けられた存在だと思っていた」という感想を話してくれました。ダンス参観日ではダンスを見る時間よりも、見た後に参加者が感想を話し合う時間を多くとっておられましたね。それもアートを成立させるための、鑑賞者の能動性を引き出すことと関係するのでしょうか。

高松●最近の傾向で「アフタートーク」の時間を設ける公演が増えています。アフタートークとは、公演後にダンサーと観客(鑑賞者)で対話をしましょうというもので、ダンス参観日はアフタートークをメインにしたものです。カギは場の創造。しかし、私は最初、「ダンスを見にきた人に、どんなお土産を持って帰ってもらおうか」と必死になっていましたが、そこが大きなまちがいでした。お土産という発想をしているかぎり参加者はお客さんにしかなれないことに気づき、その発想をやめて「ダンサーを含めそこにいる人たち全員と、どんな場を作り上げられるか」ということに視点を変えたんです。私自身はみんなから出た意見をどんどんつなげていく役に徹して、それぞれの立場をゴチャ混ぜにしていったわけです。これによってダンスを見ている側も創造する側に加えることにつながりました。本当の意味での「アートに触れる」体験ができたのではないでしょうか。

学校教育の中のアート

――「立場をゴチャ混ぜにする」という言葉が出ましたが、樋口さんがそこをポイントにしようと思われたのは、「去年の反省をふまえて」という以外に何か理由があったんですか?

樋口●「立場を変える」というのは「見方を変える」ことにつながると思うんですが、多様なものの見方や判断力を身につけておけば、どんな状況に直面しても行き詰まらずに自分で問題を解決していける。いまはとくに、そういう力を身につけることが必要な時代だと感じています。たとえば「いい大学を出て、いい会社に就職する」という一つのラインに乗った生き方が、いまはもう通用しなくなってるでしょう? 「ある日突然リストラされる」ということが、いつ誰に起こっても不思議ではない時代です。そういうことに直面したとき他の選択肢を探せるか、どれだけ幅広い視野と考え方をもっているかによって、乗り越え方が大きく違ってくるのではないでしょうか。

――今回のコモンズのテーマは、“Art of Life〜生き方、新・呼吸〜”で、「アートやNPOの活動に触れることによって一人ひとりが自分の生き方を見つめ直してほしい」という願いを込めたものでした。「アートに触れる」と言っても、学校の授業で接するアートと、展覧会や公演で出会うアートでは、そこから感じることは自ずと違っ





樋口よう子（ひぐち・ようこ）さん
アーティスト、展覧会企画者、高校の美術教員というさまざまな顔をもつ。1996年から大阪市内平野郷を舞台に、13人のアーティストが町に繰り出し、人々と触れ合う試み「モダンde平野」を開催。97年、美術展「芸術祭典・京」入賞。大阪市文化振興会懇話会アドバイザリースタッフの一人。アート大好き人間。

てくると思いますが。

樋口●学校の授業は文部科学省が学習指導要領の中で「しなければいけないこと」を規定していて、来年度から新しい指導要領になって、授業時間が短縮されて内容も変わります。高校の美術の場合は制作する時間がなく、せめて“見る人”を育てようという意図からか、創造でなく鑑賞中心になります。でも、いまの学校環境の中で、本物を鑑賞させるのは制約が多すぎてむずかしく、どこまでできるか悩みのタネです。

高松●ワークショップなどの形でダンスを取り入れる学校が増えています。昔はケンカしたり相撲をとったり、他人とじかに肌を触れ合わせる機会が多く、身体を意識することにつながりました。ところが、いまの子どもはそういう体験が極端に減っている。だから、授業の中で“身体性”を養おうとしているわけです。でもこういう機会を無理にでも作らないといけない、という状況は社会全体で見た場合、危機的ですよね。

それから、私は「情報教育」を目的に、ときどき小学校の教壇に立っています。そこで子どもたちに対して感じるのは「言葉が少ない」ということ。たとえば「にんじん好き?」ときく。「好き」とか「嫌い」とかいう答えは返ってくるけれど、「なんで好きなの?」と理由をきくと言葉が出てきません。感じていることや考えを言葉にする機会が少ないせいなのかも知れませんが、身体性のみならず、言語化の能力も落ちているような気がします。



ちょっと話は飛びますが、ドイツで暮らしていたときに感じたのは、時間の流れ方が日本とはぜんぜん違うということ。ドイツ人は労働時間が少なくて、夕方5時頃に帰宅している人も多いんです。もちろん、効率よく仕事をしているので、「ぜんぜん仕事をしない」という意味ではありませんが（笑）。そういう余裕のある生活だと自分の時間がもてるし、自分にとっての“快・不快”“好き・嫌い”という感覚をはっきり認識できると思うんですね。そういう感覚を自覚できているかどうかが、自分の生き方を考える上ですごく影響を及ぼしてくるとも思います。だから、学校でこれから必要な方針は何かといえば、感覚を磨くこと。そしてそれを言葉にできることではないでしょうか。



樋口●いまの子どもたちは鑑賞した後の感想にしろ、作る作品にしろ、なぜか似かよっていて同じに見えてしまいます。学校で勉強して、家に帰ってもすぐ塾に行って、という生活で遊ぶ時間がほとんどなく、勉強以外の経験が乏しくて発想も貧弱になっている気がしますね。

――身体性や体験に乏しい子どもたちに、いくら「ダンスをしましょう」「絵を描きましょう」と言っても、本当の意味での創作活動はできないと思いますが。

高松●学校でのダンスは、ダンサーを育てることが目的ではなく、他人の身体を意識することによって、「他人がいるから自分がいる」ということに気づく経験を目的としているわけです。美術の授業も、本当の目的はそういうところにあるのではないですか?

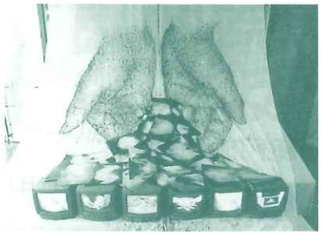
樋口●そうです。同じモノを見てもAさんとBさんでは感じ方が違うように、モノの見方や感じ方はその人の経験に大きく作用されているものなんです。ある意味では、「モノの見方そのものがアートだ」とも言えますしね。

應典院を“自己表現”の場に

――お二人は今回のコモンズで、何か発見はありましたか?

高松●ダンス参観日で、私はダンサーに対して公開インタビューのような形で質問をしてみました。「なぜダンスをはじめたんですか?」「どうしてアーティストになったんですか?」という単純なものです。しかし、お客さんの反応が俄然よくなってきた。そのことが驚きというか、「アーティストの人生観や生き方にまで関わる話を聞く機会が、ふだんの生活の中でとても少ないんだろうな」と改めて感じました。自分の周りにアーティストがいないとか、いても「自分とはまったく違う人種だ」という先入観があって、アーティストはとても遠い存在なんだと思います。

樋口●今回、しばたさんが期間中ずっと会場にいて、参加者と気さくに話をしていました。作品についての解説をいっさいしなくても、アーティスト“しばたゆり”と接して何かを感じ、作品の見方が変わったという参加者もいたでしょう。そういう話し合いの場を設定することも大切だな、と再認識しました。



高松●そうですね。アートは言葉にならないものを表現するという面もあるけれど、それだけだと独りよがりの表現で終わってしまう危険性がある。アートにあまり関心がないとか、専門的知識のない人にも通じる言葉で、「アートはもっと日常生活に関わりのあるものですよ」ということを伝えていかなくては、と感じました。

と同時に、自分を表現することに積極的になれる場を、もっともっと作っていく必要があるでしょう。「自己表現」というとむずかしそうですが、感じていることを素直に表現することで充分だし、しばたさんの作品で大切なモノについて語るのも立派な自己表現ですよ。

樋口●自己表現には、誰もが“素”になれる縁側のような環境が必要だと思います。そういう意味で應典院という場はピッタリですよね。

――ギャラリーでもなく学校でもない、應典院でアートに触れる機会をもっともっと作っていきたい、という気になりました（笑）。今日は本当にありがとうございました。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「対談を終えて」 辻　牧子（應典院インターン）



ダンスと現代美術。どちらもまだまだ「わかりにくい」と振り向いてもらえない分野です。お二人の企画に参加し、こうした「かやの外」にいた人たちがいつの間にか「かやの内」に惹きこまれていく瞬間に立ち合うことができました。教育的観点からだけでなく、知らない世界と出会う魅力を一人ひとりが経験していることは、芸術が社会の一部と認識されるための豊かな土壌となるのかもしれません。分野を問わず、人と人が自由に出会いを広げることのできるコモンズフェスタはそういった意味で、アートを育む場であったと思いました。

自分らしい生き方を……第30回寺子屋トーク

コモンズフェスタ最終日の11月11日（日）、第30回寺子屋トーク「お骨の行方～人生の店じまいを考える～」を開催しました。

ゲストに、ノンフィクション作家の井上治代さん、妙光寺住職の小川英爾さんをお迎えし、第1部は井上さんの基調講演、第2部は井上さんと小川さんによるトークセッション。

自分らしい最期を、という風潮が高まりつつある現代社会、井上さん、小川さんが続けてこられた活動は、その先駆的なもの。当日は、熱心な参加者100名が詰めかけました。



「お骨の行方」というテーマの中、お二人が異口同音に強調されるのは、「自分の死に方を決めるということは、生きている“いま”を問い直すこと」でした。自分らしい最期を迎えるために、いまの人生を自分らしく生き抜くという、大きなメッセージをいただいたように思います。

以下は、当日司会を務めたインターンの瀧頭友未さんのコメントです。

◆ ◆

寺子屋トーク「お骨の行方」の司会という仕事は、應典院インターンとして初めての大きな仕事でした。この仕事を任せてもらえた中で私が学んだことは、言葉探しは自分探しである、ということ。自分が司会原稿を書いていくことで「お骨の行方」というプロジェクトに対しての自分の客観的な視点を育ててもらった気がしてなりません。「客観的にモノを見ていく」ということは私の應典院インターンとしての大きな課題でした。いままで知らず知らずのうちに自分が感覚的な文章を書き、無難すぎる言葉を選ぶことで自分自身をごまかしていたことにも気づかされました。

いま思えば、司会原稿を書くということは自分の感情抜きで物事を捉え、言葉で表すこと。つまり、應典院と寺子屋トークのつながりを、私は枠の外から見て表現していくことでした。また言葉では表現することができても、参加者の前で伝えるということができなければ司会としての役割を果たせません。

今回は司会といっても原稿を読むという形だったので、その場その場で自分の意図することを相手に伝えていくことが、これからの私の課題だと思います。

地元から全国へ……

～應典院連続提携公演、2月に開幕！！

昨年度までは、應典院で活動する劇団を中心に開催してきた舞台芸術祭SPACE⊠DRAMA。2002年は、「應典院連続提携公演」として東京から1劇団、地元・大阪から3劇団を迎え、開催いたします。

ここ数年は應典院で活動する劇団に呼びかけて開催してきましたが、2003年より全国から劇団を募集し、関西公演の足がかりの場づくりだけでなく、地元劇団と地方劇団の交流を目的とした演劇祭を目指していきます。

異なる表現形態の劇団同士がどのような交流を図り、どのようなネットワークを生み出していくのか。どうぞご期待ください。

◆◇◆◇スケジュール◇◆◇◆

●シアターシンクタンク万化（大阪）
2月1日（金）～3日（日）
「アルケミスト」
作：美浜源八／演出：小田益弘
1日（金）…19:00
2日（土）…15:00、19:00
3日（日）…14:00、18:00

●劇団メロディアスメロン（大阪）
2月9日（土）～10日（日）
「ユモレスク―humoresque―」
作・演出：桂正樹
9日（土）…19:00
10日（日）…14:00、18:00

●醜団リンチ（東京）
2月15日（金）～17日（日）
「肛門時代」
作：丹羽克子／演出：世志男
15日（金）…19:30
16日（土）…14:30、19:30
17日（日）…15:30

●南船北馬一団（大阪）
3月1日（金）～3日（日）
「大典礼
～黒いシーツに横たわるちまみれの白い肌～」
作：フェルナンド・アラバール／構成・演出：棚瀬美幸
1日（金）…19:30
2日（土）…15:00、19:30
3日（日）…14:00、18:00

Make up Community
コミュニティな人々

ゲスト：中川幾郎さん

NPO（民間非営利組織）の活動が活発になり、その役割や存在意義を問い直す必要性が、あちこちで叫ばれはじめています。そもそも「公益」とはなんなのか？　誰がそれを決めるのか？　などなど、議論されるべき課題が山積しているのが現状でしょう。

コモンズフェスタで行われた公開研究会のゲスト、帝塚山大学・法政策学部教授の中川幾郎さんにお話を伺いました。



NPOの存在が広く認知されるようになり、「公益とは何か」という議論も活発に行われるようになりました。いままでのような「不特定多数の第三者利益」という捉え方だけではNPOの活動が狭められてしまう危険性があるため、新しい意味づけが必要だと考えています。

また、「コモンズ」の定義も「官でも民でもない、その中間」という捉え方が一般的ですが、もっと多様に分解しなくてはなりません。應典院はその一つとして民間管理型のコモンズ（公共領域）を独自に作られ、新たな価値を次々に生み出していると思います。

他にも多くのNPOが活発に活動していますが、その活動領域をさらに拡げていくには、新しい評価システムが必要です。価値をどう測定するかということですが、いままでは残念ながら数量的・金銭的に測定できる価値しか認められてきませんでした。「子どもたちがイキイキしている」という状態を測定するモノサシを、行政も市民も作ってこなかった、お互いに未熟だったわけですね。

人々の行動がどう変わり、社会がどう変わったかを測定できる評価システムを早急に作らなくてはいけません。そのためには一人ひとりの市民の価値観や自立度も問われます。行政にお任せでは真の市民社会は築けませんし、「公益」の意味が誤解されたまま、NPOは行政の下請けにしかなり得ないでしょう。

しかし、やはりNPOが活発に活動すればするほどコミュニティは活性化するだろう、とも考えています。NPOの活動にふれて、人の世話をする、社会の役に立つという体験をすることによって、「この町が好き。住み続けよう」と思う人々が新たなコミュニティの担い手として動きはじめる、そういう回路が出てくるだろう、というのが私の希望的観測であり、願いです。

應典院もその装置の一つとして、これからも活動していってほしいですね。

秋田住職発 應典院掲示板

同時多発テロから2ヶ月が経って米国社会のなかに、「異文化をわかりあおう」という草の根の活動が始まったと、朝日新聞の社説（11・28）は報じています。

唐突なようですが、ぼくはあらゆるアーツ（芸術）は、異なる文化や価値を結ぶ架橋でなくてはならないと考えています。相手が外国の人であろうとなかろうと、人間は絶望的なほどわかりあえない。たとえば大人と子どもの深い溝を、両者がわかりあうために、アーツはどのような「つなぎ」を創造することができるのでしょうか。

島国日本は、ひとつの価値に染まりやすく、逆に異文化を排除したり差別したりしてきました。平田オリザさん（演出家）が指摘するように、会話はあっても、ほんとうの対話がなかったのです。対話は「理論」だけではありません。苦しみや弱さに対する「共感」も、対話を創造する重要な鍵です。

人と人がわかりあう、という、当たり前だけど、じつに困難な関係づくりに、アーツの役割は小さくないと思います。



■神宮寺で坊さんサミット

去る10月13・14両日、おなじみの長野県松本市の神宮寺で、「全国坊さんサミット」が開催、各宗派の僧侶8名と市民による論戦に参加しました。

神宮寺の高橋卓志住職はもちろん曹洞宗は無着成恭さん、日蓮宗は小川英爾さん、ついでに浄土宗から私も混じって、戒名から生命倫理、アフガン戦争まで幅広く話し合いました。

論戦もなかなかのものでしたが、オープニングに実施された各宗派僧侶の正装の出勤による「平和への祈りの法要」に、私としては痛く感激しました。

■知恩院璽書道場を成満

浄土宗のお坊さんのだいじな資格をいただくための璽書伝授道場が、11月19日から1週間、総本山の知恩院で開かれ、無事満行させていただきました。

修行僧は総勢76名。寝食をともにしながら、早朝5時から夜の10時まで、ひたすら礼拝と礼賛を重ねる強行軍ですが、15年ぶりの道場は、本当に清々しくありがたい気持ちで一杯でした。授かった私の戒名は「應蓮社教阿遍誉光彦」です。

それにしても、念仏道場のなんと演劇的なことよ！アーツについての原点を垣間見た貴重な体験となりました。南無阿弥陀仏。

■新刊「宗教と人間の未来」

去る4月に開催された宗教シンポジウムを再録した「宗教と人間の未来」が白馬社から発刊されました
（1905円）。解剖学者の養老孟司さん、作家の井沢元彦さんらと語り合った全貌をまとめています。既成仏教から私が参加して、教団に依存しない一寺院の発奮を語りまくりました。

それと、2001年度日本ボランティア学会誌に「アートとコミュニティ」についての論考も寄稿しています。

■NHKテレビに瀧頭さん登場！

うちのインターンのひとり、瀧頭友未さん（佛教大学3回生）がNHKテレビの情報番組「とっておき関西」に出演、彼女のインターン活動先として、應典院も紹介されました。うんと成長した瀧頭さんの表情が印象的でした。12月3日に放送済。

上本町CN構想スタート！

5年後の再開発が予定されている上本町地区（赤十字病院跡地）ですが、このたび担当の都市整備公団の呼びかけで、上本町コミュニティネットワーク（CN）構想委員会が発足、京都大学の高田光雄助教授、大阪大学の渥美公秀助教授らといっしょに委員として参加させていただくことになりました。

1回目の会合が、去る11月7日、應典院で開催、委員のほか公団や大阪市、天王寺区、開発業者の近鉄からも参加があり、本格的な論議が始まりました。とくに、構想の柱の一本に「芸術・演劇を基軸としたまちづくり」というテーマがあり、コミュニティ・シアターとしての應典院に対する期待も大のようでした。

それにしても、いまや大型の開発プロジェクトにも、NPOやコミュニティサービスのノウハウが受け入れられる時代。時代の変化を感じます。

